



怪訝なローレインの瞳

永代美知代

これは前號「春の小人」の續きで、静かにお読み下さい。
この篇は科學の知識が和らかな面して極く解りよい
言葉で豊かに盛られてゐますから、それから挿繪はあ
なじみの森田久重伯であります。

根の國の番人

田舎の、おばあ様のお屋敷へ遊びに来て、
一人で花園を作つてゐたローレインは、此間
から毎日種蒔きだの植ゑ替えだの、お花のこ
とばかりに忙がしくつて、まだ、おかあ様が
お家から送つて下さつた新しい御本を讀む
暇も有りませんでした。それで、今日は、そ
の御本を持つて花園のベンチに坐り込みまし
た。けれども、一向ねつから御本が面白くあ
りません。さうしてお花のことばかり考へ
てゐるのでした。

「種子は今ごろどうなつてゐるだらう？ 若しか
して、私が土地の中へ行つて見ることがで

きたらどんなだらう？」
など考へてゐますと、
「ええ、いらつしやいとも！ そりや
ア美事ですからね」
と元氣のよい小さな聲がふと耳許に聞えま
した。

吃驚するよりも喜び立つたローレインは、
ベンチの凭れに不思議な小人が腰懸けてゐる
のを見つけたしました。緑色のボタンのある
褐色の着物をきて、妙な恰好のお鼻でやつと
持ちこたへるほど大きな眼鏡をかけてゐまし
た。ちよいと見たところでは、どうしても小
さな自動車運轉手をつくりです。

「あら、あなただつたの？ でも私、どうして
行けるんでせう？」

とローレインは笑ひながら訊きました。
「何でもないこと、おやすいこつてす。私と
一緒に地下鐵道でいらつしやればすぐ根の國



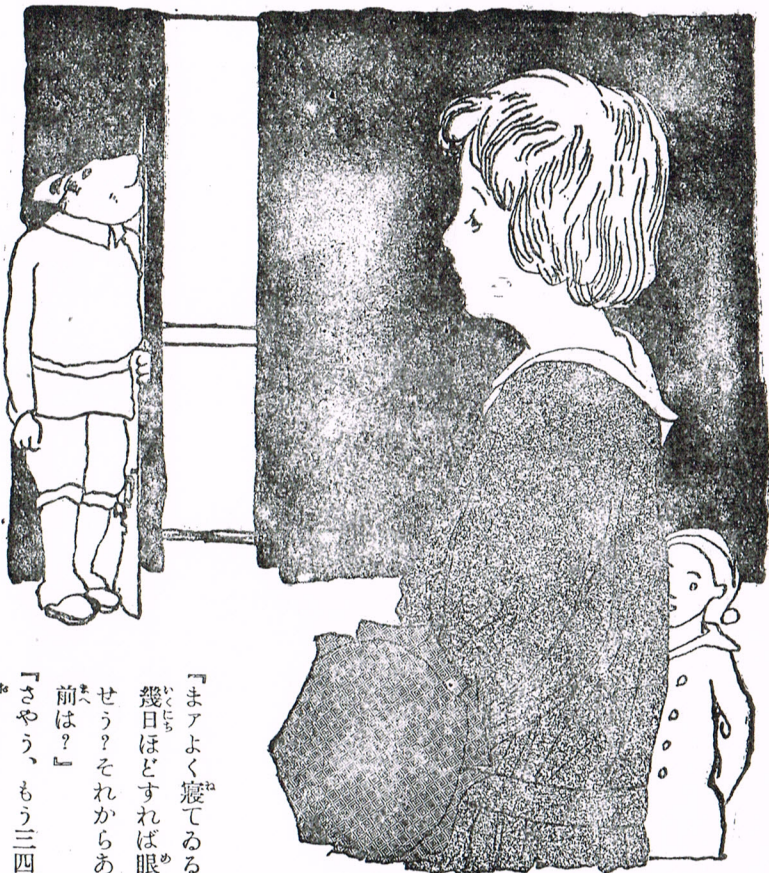
へ行けますよ」

「あなた、根の國の方？」

「左様です。私は地下鐵道の番人ですがね。
さア、私の手に觸つて、眼をつぶつてごら
んなさい。エレベーターへお乗せするには
あなたはちつと大き過ぎますからねえ。は
はは」

おや、ローレインの身體はだん／＼小
さくなりましたが、そんな事をローレイン
はちつとも心配しませんでした。やがて二人
は小ほけなエレベーターに乗つかつて、本當
に土地の中へと降つて行きました。

「何處のステーションで降りませうかね？」
と地下鐵道の番人は訊きました。



「まアよく寝てゐること、もう
幾日ほどすれば眼を覺ますで
せう？ それからあなたのお名
前は？」

「さやう、もう三四日もすれば
起きるでせう。それから私の
名前は何？」

「私の名前は地中のちび三
番人はたのしげに唄ひだしました。

「家は地の下六寸七寸
いつも春先き春のころは
世界一等はたらく小人

世にも忙がし地中のちび三

歌つて了ふとちび三は、とある寢床に寝て
ゐたスプートビーの赤ちやんを、ころりと引
つくら回しました。

「驚いたねえこの兒は、頭を下向けにして眠
つてゐる。地球の中へ生えて出てどうする
つもりなんでせう」

「ほかの、根の國の人たちは？」

とローレインが聞きますと、ちび三は、
「大方會議室に集まつてゐるのでせう。さア、
女王のところへ御案内を致しませう」

臆ろけな明の射す、長い／＼廊下を通り抜
けて、二人は大きな扉口の前に立ちました。
扉口の左右には巡査の制服を着けた、二匹の
肥つた鼯鼠が番をしてゐました。ちび三はそ
れへ合言葉をかけて扉を開かせました。

明るい、立派な會議室の中には手／＼に松
明を持った大きな蟲が一杯に居並び、一段高
い玉座には黄金と真珠との王冠をいたゞいた
女王が坐り、女王の背後には大變賢こさうな
顔をした女官たちが立ち並んでゐました。

「女王陛下、この人が、この花園を作つたロ
ーレインでございます」

とちび三は恭しく紹介いたしました。

「よく見えられた。私たちは今度あなたが根の國へ送られた新しい美しいチューリップの名前をつけるために、今丁度會議を開いてゐるところです。これは大變美しい花だから是非美しい名前をつけねばならぬ。ローレイン、あなたが何か好い思ひ附きが無いかしら？」

と女王は親しげに訊くのでした。

「女王陛下、地中の女王とおつけになつてはどうでせう、あの花を見るたびに、私の國へ參つた事を思ひ出すでせうから」とローレインは申しました。

「あゝそれは本當に美しい名前です、これこれ。誰か記録官にこの名前を録させてお置き」

丁度、地下鐵道の發車のベルが氣魂ましく鳴り響きましたので、ローレインは遠く女王にお暇をひして、さつき居眠りさうになつてゐたベンチの上まで歸つてきました、そして眼を開けると、料理女のノラドがお晝御飯の知らせの鈴を鳴らしてゐたところでした。ローレインは御本を持つてお家へ入つて行きました。

「面白かつたかい？」

「えゝ、大變」
しかし、おばあ様はローレインの返事を御本のことだとばかり思つて被在いました。

霜吉の意地悪

ローレインの花園は日ましに活氣づいて參りました。チューリップが露を受けるために、その繪にかいたやうな美しいコップを持ち上げ、ライラックはその紫色の蕾を重さうに傾け、花園を荷ふ林檎や桃の花は落ちて地上を飾りました。山果樹の花は今すこしで眞白に開かうとして、蒼味がよつた優しさを見せてゐました。

ローレインはいつものやうにベンチの上になつて愛らしい花をみつめてゐました。今日は少しお寒いので、乳母が毛布を持つて來てくれました。

すると、ふと小さな聲が聞こえました。

「はゝゝ、變だなア、スノーボールなんて云ふから眞白な花かと思つたら、なアんだ、穢ならしい、蒼白い顔をしてるぢやないかはアいだ。」

「可いことよ、もう一週間もしてごらんさい。私たちは眞白な美しい花を咲かせま

すからね。本當に雪の球みたいな花をね」
「莫迦云つてらア。この忙がしい時に一週間も待つてゐられるものか。それに、夏中待つてたつて、お前が眞白になるものか」
頻と云ひ争つてゐる聲で、ローレインはその一人を霜吉で、ほかの一人はスノーボールだと氣が付きました。

霜吉は相變らず性惡を云ひ續けてゐます。
「お前が本當のスノーボールかさうでないか今夜試験をしてやらう。見ろ」
と霜吉は北の空に蔓こつてゐる黒雲を指して、

「あすこに黒雲の小父さんが待つてらア。僕が頼めば小父さんは直ぐに仲好しの雪雄君を此處へ連れてくるからね。雪雄君が來れば、お前が名前のやうに、雪のやうに白いかどうかすぐ解るんだ」

スノーボールは恐ろしさに身震して、

「あら霜吉さん、もう勘忍して彼方へ行つて頂戴。こんなに穩かになつてから、あなたが此處へ來ることは無いぢやないの。あなたはもう、北の方へ行つて仕事をしなきゃならないのでせう？」

「本當にひどい霜吉だ。もう行つて了へばい

いのに。でも霜吉はつむぢ曲りだから、私が云つたつて諾いては呉れないだらう」

とローレインも心配しました。まつたく、霜吉は性惡で、人がどんなに苦しまうが、一向お構ひなく、自分の惡戯ばかりする兒でした。勿論、どんなに人が忠告しても、聞くやうな子供ではありません。で、ローレインは何か別の手段で、可哀相なスノーボールを助ける方法はないものかしら、今夜にでも雪が降れば可愛



「おひ霜吉、君はこんな處で何をしてるんだい？ 君は今日夕方まで北の方で仕事をするやうに云ひつかつてゐる筈ぢやないか」
日光太郎は霜吉を見るなりさう云ました。
「うゝん僕、一寸遊びに歸つて來たのさ」
「ぢや早く駆けつてゆきたまへ。ね、好い兒だから」

「否だ」

日光太郎はもう何にも申しませんでしたが、その代り天に向つて合圖を致しますと、忽ち、輝く剣を抜きかざした日光太郎の大軍隊が花園一杯に入

氣を揉んでゐました。

「こんな時に日光太郎が居さへすれば、霜吉はすぐ追つ拂へるのだけれど——どうかして日光太郎を呼んで來たいものだけれど」

ぐ來てこの花園を暖ためて下さいって。」

「おやすい御用ですわ。」

そのまゝ西風は輕羅を空にひるがへしながら飛で行きましたが、すぐ、日光太郎を連れ

つてきました。この不意打ちに驚いた霜吉は、後をも見ずに北の方へ逃けて行きました。日光太郎は、それから夕方まで花園にゐて、美しい花に元氣をつけました。

ローレインが夕飯にお家へ歸つて行きますと、おぢい様が被仰いました。
『午後から天氣が寒くなつて、今夜あたり霜が降るかも知れないから花園に霜除をしようと思つてゐると日が差して來たのう』
『ええ本當に好いお天氣になりましたわね』とローレインもにつこり致しました。

植直し屋の働き

六月の爽やかな朝でした。ローレインは仔馬の馬太郎に乗つて森や野原から澤山美しくいお花を摘み集めてお家へ歸りました。すると下男のジョンが、廣い芝生に兩膝ついて、何か忙がしげに仕事してゐました。

『ジョン、何を爲てゐるの？』
『おと、嬢ちゃん、お歸んなさい。たんぼの根を除つてゐるのですよ』
『あら、何故根を抜いちまうの？ジョン、お前たんぼが嫌ひなの？私、大好きよ。たんぼは氣持の好い、可愛い花ぢやないの？芝生の中に咲いてゐるところは、丁度、蒼い大空に小さなお日様が輝いてゐるやうに見えるぢやないの？それに何故根を抜いちまうんでせう？』

『おぢい様のお云ひ付けなのです。おぢい様はね、たんぼが芝生の草の根を荒らすのでお嫌ひなのです』
さう云ひながら、ジョンは馬太郎を腰へ引いて行きました。

その朝はローレインにも忙がしい朝でした。おぢい様は遠くの麥畑を見廻りに行かれ、ジョンは菜園に植ゑつける馬鈴薯の種芋を小さく切つてゐましたが、やがて、ローレインに、
『嬢ちゃん、植ゑるのを手傳つて下さい』と頼んだからです。ローレインは喜んで手傳ひました。種芋を穴へ入れると、ジョンが土をかけて行きました。お晝飯が済むとジョンも野良へ出かけてしましたので、ローレインは今度はお臺所を手傳ひました。それから料理番のノラを助けて焼いたお菓子を四つ五つ衣囊に入れて、一人で花園へ出て参りました。

天は晴れ渡り、日は暖かく芝生を照らしてゐました。四邊は静かで、香高い花の呼吸する音さへ聞えました。その静かな世界を破つて、忽ち人聲が起りました。
『そつと、そつとだよ、そつちの隅にもつと土を被せて。よし、お次ぎだ。可哀相に、

こんなに根を傷められとる。氣を付けて植ゑろ。よしよし。』
黄色な襦袢を着て、褐色の靴下、褐色の靴、緑色の帽を冠つて小人の群が、鋤だの鋤だのもつて切替と働いてゐる、それを一人の親方らしいのが指圖をしてゐたのでした。

小人の親方は、ローレインを見上げて可憐にお辭儀しながら、
『これはお嬢様、好いお天氣でございます。私達は下男のジョンのおかげで、眼を廻すほど忙しいんでございます。私達は植直し屋なんです、今日は根を抜きとられた、たんぼの植直しをやらされとります。私達はみんな枯れちまひますのでね。』

『まア、好い事を爲ておくれで有り難うよ。私もね、抜かれたたんぼが可哀相で可哀相で仕方が無かつたの。』
『さア可し、みんな、歌ひながら歸るとしよう』
親方はさう云ひつけて、ローレインに、
『ちや左様なら、今夜にでも雨子がちよいとでも來て呉れますれば、可哀相なたんぼは翌朝までにすつかり元氣になりますで

せう』
植直し屋は隊を組んで、鋤や鋤を肩に、うたひながら歸つて行く――親方が初めて、こんな風に歌ひだしました。

『私は何時でも植直しする元氣な私と手下とて何時でもたちまち植直しする』
すると、手下の小人たちは聲を合はせて、かう歌ひつづけてました。

『本當にあなたは植直しする元氣なあなたと手下とて何時でもたちまち植直しする』
何時でもたちまち植直しする

『御覽なさい嬢ちゃん！又たんぼがあんなに澤山咲いてゐる！抜いても抜いても後から生えるんですからなア。それに昨夜雨が降つたものだから、抜いた



分まで根を下しちまつた！』
下男のジョンは腹を立てゐました。ローレインは優しい聲で、

すみれ、たんぼ、野薔薇、牧場にはさまざまの花が美しく咲き亂れてゐました。ローレインは仔馬の馬太郎を連れて、花を摘みに牧場へ來てゐました。

やがてローレインは、とある巖陰に世にも美しい花を見つけた。それは常春藤の花でした。

『まア可いこと私、持つて歸つて花園の中に植ゑ代へよう。さうくベンチの傍へ植ゑるといふわ』
で、その根を掘らうとした時、吐りつけるやうな小さな聲が、ローレインの手を引つ込ませました。

『可けない！觸つちや可けない！』
小人から、こんなに激しい調子でものを云ひかけられた事は、ローレインには初めてでした。驚いて、すこし身體を退らせて、ちつと見ますと、其處には、ピカ／＼光る剣を抜きつれた小人の軍隊が、二人の將校に引率されて常春藤の花の周囲に立ち並んでゐました。

將校は一足前に進み出て、帽子を脱つて、恭しくローレインに一禮しながら
『だしぬけに驚かせて相済みません、どうか

小人の將校

御許し下さい。しかし、あつてお止めしなければ、あなたのお手はこの花に觸つてゐたでせう、危ないところでした」

「ですけど、何故私がこの常春藤の花をお家へ持つて歸つては悪いのでせう？ 私はいつでも花を好くんですから」

とローレインは將校に訊ねました。

「左様です。あなたが花をお好きで、花に御親切なことは、小人の世間で知らない者は一人も有りません。ですが、此の常春藤は毒なのです、毒花なのです、あなたに親切な小人たちは決してあなたを此の花に觸らせ度くないのです。私達は子供が間違つて此の花に觸らないやうに警護してゐる軍隊です。でも、稀には私達の云ふことを諾かない子供があつて、毒に中てられます」

と將校は丁寧に説明いたしました。

「でも此の花は下男のジョンの小屋の周圍に咲いてゐるのと同じでせう？」

「いゝえ違ひます。ジョンの家の周圍に咲いてゐるのは忍冬の花です。あの花の葉は五枚づつで、ちつとも葉ではありません。ねよく御覧なさい、此の花の葉は三枚づつつきや無いでせう？ですから、葉の數さへ覚えていらつしやれば、決して間違ひつゝは有りません。」

「まあ、危なかつた！」

ローレインは心からこの小人の將校にお禮を申しました。將校は満足さうな笑聲を残し、部下の兵隊を連れて、何處ともなく進んでゆきました。その軍隊の刀の光が、日光にキラキラと輝きました。

ローレインは、わざと、仔馬の馬太郎を其處へ引張つて来て、よく常春藤の花を見せながら、

「お前、間違つても此の葉をお喰ひでないよ」と云つて聞かせました。馬太郎は、「はい、私は喰べて好い草や葉をよく存じてゐます」と云ひ度けな顔をして、常春藤の葉には眼も呉れず、近廻りの、柔らかに、おいしさうな緑の草をもしやく喰ひてゐました。

春の精のダンス

「夏が来る！夏が来る！」

ある朝、赤胸の駒馬がさう云つて歌ひました。すると野の雲雀も

「夏が来る！夏が来る！」

それに答へて微ふく風も

「夏がくる！夏がくる！」

と囁きました。

すると、楡の樹の上に集つてゐた目白が、

「あら可笑しい。珍らしいやうな何を云つてゐるの？いつでも夏は今時分に來るぢやありませんか？」

と笑ひました。

「ええ、それは解つてゐますわ」

下男のジョンが作へて置いた大きな燕ホテの扉口に立つてゐた燕さんも話の仲間に加はりました。

「でも、何時でも夏と會ふのは嬉しいからぢやありませんか？」

ベンチに凭れながら、ローレインはさうした小鳥や、風のお話を聞いてゐました。ローレインのすぐ眼の先きでは、大蜜蜂が古い巢に新しい部屋を取りつけるので忙しさうでした。ローレインは、蜂がお家を作るのを見るのが大好きなので、料理女のノラに、この巢を拂ひ落さないやうに、前から頼んで置いたのです。

本當に、私も夏は好きよ。だつて、春に別れるのも悲しいわ」

とローレインは小さな溜息をつきました。

「そんなに悲しまなくともようござんす。夏が來れば、あなたは屹度私達と一緒に被在つた時のやうに楽しいんですからね」

優しい小さな聲は、それから又話し續けました。

「此處での私の仕事はもう済みましたのよ。」



今度は天の母様のお申付で、もつと北の方へ参りますの今夜十二時きつかりに、あなたが小さな寢床でぐすり寝込んでらっしゃる間に、私も、春の小人たちも、みんな翅をひろけて北のお國へ飛んで行くのです」

「春子さん、あなたはさうして年中働いて被在るの？」

「ええ、さうなのですよ。」

世の中はね、働かなければちつとも楽しくないのですもの。ね、さうでせう？」

と春子はいこやかに笑ひました。

「でも春子さん、あなた時は遊ぶこともあるでせう？」

「ありますとも。私たちの遊びはそれは面白いんですよ。もしかしてお望みなら、春の小人を呼び集めて、ダンスを躍ってお目に懸けませうか」

「まあ嬉しい。ぜひどうか」とローレインはもう夢心地になつてゐるの

でした。

春子が小さな手を叩くと、花園の中は見える世にも美しい姿で満たされました。春子と呼ばれた春の美しい精は、数限りもな

てゐましたので、それ／＼へ挨拶の微笑を投げかけました。

泡壤の一隊の、真紅な帽子や上着はもう些し暑さうに見えました。スカーフトビーの種子を植ゑた豆太郎たち、根の國の地下鐵道の番人のちび三、植直し屋の人たち、やはり長い緑色の着物を着た松姫、その女王、それから毒の花を見張つてゐた小人の將校と兵隊さんを初め、またローレインの出會つたことのない小人たちも多勢交つて面白く踊り出しました。赤胸の駒馬がダンスの歌をうたひました。

ダンスが済むと、駒馬は主人のロビンさんを御晝に呼びに行きました。その歌を合圖に春の小人たちも、春の精も、一齊に美しい歌をうたひながら日光に充ちた大空へ飛んでゆきました。そのうた――

「春はゆく、左様なら、

夏は来る、かゞやいて

楽しさに、かゞやいて

夏は来る、囀ちやんに」

「のう、ローレイン、明日からは夏ですよ、嬉しいかい？」

と其晩、おばあ様からおつしやいました。

「ええ、嬉しいわ。だけれどねお祖母さん、春も本當に美しくかつたわ。」

とローレインは申しました。